

初学者理学療法士の臨床推論能力支援に向けた知識管理に関する検討

○島山 駿弥^{1,2)}, 堀 寛史³⁾, 松下 光範²⁾

- 1) 兵庫県立尼崎総合医療センター リハビリテーション部
- 2) 関西大学 総合情報学部
- 3) びわこリハビリテーション専門職大学 リハビリテーション学部

【はじめに、目的】

理学療法士の自律した業務遂行に臨床推論能力が重要であると先行研究で述べられている。しかし、臨床推論は系統的な方法がなく、ある疾患に対しての考え方やいった専門性が高い（汎用性の低い）内容が多い。そのため、新人に対して個人や施設の独自の考えを指導することが多い。本研究では、系統的臨床推論の確立を求め、経験の浅い理学療法士が臨床推論のプロセスのどの部分に不足が生じるかを明確にし、教育のみならず、職員管理の視点でその有用性を検討する。

【方法】

対象は急性期病院に勤務する1-5年目の理学療法士15名。検者は事前に模擬症例を作成した。step1として、実際の業務を想定し理学療法処方箋として患者情報(疾患,年齢,性別)を提示,その情報を基に被験者には必要な情報の項目を列挙させた。step2として、被験者が列挙した情報を入力したシートを提示し,解釈させた。step3でstep1-2の情報を基に統合と解釈を記載させ,第三者による15点満点での採点を行った。なお,事前に情報には検者らを含め多数の理学療法士により情報の重み付けを4段階で行っている(以下Rating)。Ratingが1-2のものを優先度の低い情報(以下:低Rating),Rating3-4のものを優先度の高い項目(以下:高Rating)とした。

これらの情報より,①経験年数,②-1低Rating列挙数,②-2高Rating列挙数,②-3総数,③統合と解釈の点数をそれぞれ変数とし,それぞれの相関関係を検定した。

【結果】

相関係数は,経験年数と統合と解釈($r=0.55$),低Rating列挙数と統合と解釈($r=0.28$),高Rating列挙数と統合と解釈($r=0.71$),総数と統合と解釈($r=0.68$),高Ratingの情報と統合と解釈には強い正の相関,経験年数と統合と解釈の点数には弱い正の相関を認めた。経験年数と低Rating列挙数($r=0.16$),経験年数と高Rating列挙数($r=0.29$)・経験年数と総数($r=0.4$)と経験年数とそれぞれの列挙数には優位な相関関係がなかった。

【考察】+【倫理的項目】

統合と解釈は経験年数以上に,優先順位の高い情報収集や理学療法評価を適切に選択できているかという項目において相関係数が高かった。理学療法プロセスを考えると,適切に疾患・評価の知識を有していなければ統合すべき材料が不足し,統合と解釈につまづくと言える。初学者理学療法士の支援には,有識者による評価チャート作成・Ratingを踏まえた知識管理と使用が有用であると示唆された。

【倫理的配慮】研究の実施に際し,被験者には口頭で説明を行い理解を得た上で同意書にサインをいただいた。また,文章データなどはIDを使用し匿名化した。

当院理学療法士の筋触察に対する関心について

○前田 雄太

クロス病院 リハビリテーション科

【はじめに、目的】先行研究より理学療法において関節可動域制限や疼痛の原因の評価・治療をする際には筋を正確に触察することが必要であると述べられている。

当院では、急性期の整形疾患を対象とした病院であり、術後の侵襲筋や慢性整形外科疾患に対する痛みの評価として筋触察を院内学習として取り入れている。しかし、筋触察は学生時代に覚えた起始・停止の知識だけでは不十分であり、筋の形や位置などを正確に把握しないと目的の筋が触れているのか確認が難しく技術を獲得するのが難しい。また、理学療法士養成校間によりカリキュラム内容に多少の違いもあり、筋触察を習う機会がなく臨床に出ることも珍しくない。

そこで、当院新人理学療法士(1~3年目)に筋触察を経験し、どのように感じたかアンケートを取り、今後の新人教育の参考にするため研究を行った。

【方法】当院理学療法士4名(1~3年目)に対して、参加しなくても業務上の不利益がないことを説明した上で同意を得た者のみ回答してもらった。自作のアンケートを配布し、筋触察に関する設問として「学生時代に筋触察に関する授業の有無」「臨床現場で筋触察の必要性の有無」「臨床上のどこに筋触察が役に立つか」等の質問に対して多肢選択及び自由記載にて回答してもらった。

【結果】4名から回答を得られた。「筋触察の興味」、「臨床現場での筋触察の必要性の有無」に対して全員「ある」との回答が得られた。また、「学生時代に筋の触察の授業の有無」という問いには1名「ある」と回答があったがカリキュラムの有無に関係なく「臨床現場での筋触察の必要性の有無」は全員「ある」との回答であった。

【考察】+【倫理的項目】今回、当院理学療法士の筋の触察に対する関心度に対してアンケート調査を行った。臨床現場で実際の患者さんを担当することで筋触察の必要性を知ることができた。

今回は当院理学療法士のためのアンケートであり、人数も少ないため今後はさらに人数を増やして研究を行っていく。また他の病院等でも調査を行い、学生時代のカリキュラムの有無や臨床に出てからの認識について新人だけでなく経験年数の多い理学療法士も対象として調査していく必要があると考える。

【倫理的配慮】研究結果や研究参加の有無が勤務等に反映されることはなく、不利益を受けることもない旨をアンケート用紙の説明文に記載し、アンケートの回答することをもって同意とみなした。